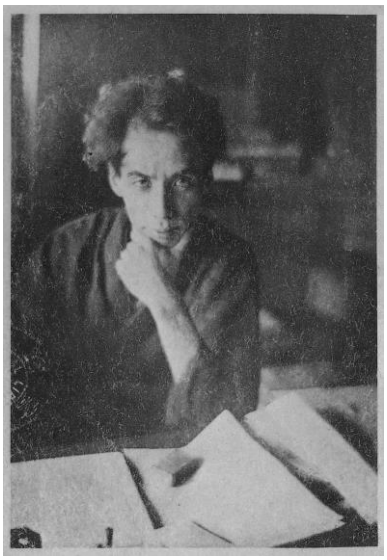
Ｎｏ．５１４【２０２２年７月２２日配信】

昭和２年の芥川龍之介来青　その１（担当：村上亜弥）

こんにちは。歴史資料室の村上亜弥です。

令和４年（2022）は作家・芥川龍之介（1892－1927）の生誕 130 年という記念の年です。そこで、今回は昭和２年（1927）の芥川龍之介来青についてお話ししたいと思います。



芥川龍之介
（国立国会図書館「近代日本人の肖像」より）

芥川は亡くなる２か月前の昭和２年５月 21 日に青森市を訪れ、出版社の改造社が主催する「現代日本文学全集講演映画大会」（会場：青森市公会堂）で講演を行いました。但し、『東奥日報』に掲載された講演会の広告には講演者として秋田雨雀（黒石町〈現黒石市〉出身の作家）と片岡鉄兵（岡山県出身の作家）の名前しかありません。実は、芥川の講演は急遽決まったものだったのです。

この頃、改造社は全国各地で作家による講演会を開催していました。芥川は５月 13 日に上野駅を出発して仙台、盛岡、函館、札幌、旭川、小樽を回って講演を行い、５月 21 日の昼過ぎに青函連絡船で青森市に到着しています。この日は午後 11 時 10 分発の列車で新潟へ向かうため、発車時刻までは青森市内で休養をとる予定となっていました。

東奥日報社の竹内俊吉（のちの青森県知事）は、この日の芥川のようすを「青森へ来た芥川龍之介」（『東奥日報』昭和３年７月 13 日付）という記事にまとめています。記事によると、青森市に到着した芥川は秋田が滞在している旅館・塩谷支店を訪れました。そこには講師の世話役として淡谷悠蔵がおり、芥川の到着を竹内に電話で知らせました。淡谷からの電話を受けた竹内は同僚の阿部泰雄とともに塩谷支店へ向かい、芥川と歓談しています。

芥川が「林檎の花を見たことがないんです」と話すと、淡谷は「見に行きませんか、きれいですよ」と誘いました。淡谷は新城村でリンゴの栽培をしていたため、ぜひ見せたいと思ったのでしょう。リンゴの花についてさらに芥川が尋ねると、淡谷は「淡紅色のカーネーションに似てゐます」と答えています。芥川はしばらく考えたあと「行つて見たいな･･･」と言いましたが「二時十分の奥羽線上り列車には十分おそかつた」ため、断念したといいます。

このできごとについては、芥川が講演旅行で感じたことなどを記録した「東北・北海道・新潟」（昭和２年８月１日発行の雑誌『改造』に掲載）に「もう十分早かつたら、林檎の花の咲いた中にほのぼのと鮭を食つてゐたものを」とあります。短い文章ですが、リンゴの花を見ることができず残念に思っていたことがわかりますね。

この後、芥川は公会堂で講演を行うことになるのですが、続きは８月の担当回でお話ししたいと思います。

※芥川龍之介「東北・北海道・新潟」は『芥川龍太郎全集』第 15 巻（岩波書店　1997 年）に収録されています。